

本研究は、秋田県C町を拠点に行っている一連の児童学総合研究の一端を荷っている。

目的：戦後の社会変動が子どもの生活にどう影響を与えたかを—山村の事例研究を通して明らかにしようとするものである。戦後農山村においても社会・経済の急速な進歩、発展に伴う生活手段の変化と生活水準の向上、社会関係の変化や交通・通信手段の進歩による行動範囲(生活圏)の拡大は、地域の大人たちの生活や物に対する考え方(意識)をどう変化させ、それが子どもが育つ過程にどう反映させていったかを、社会変化が比較的圧縮した形で観察できる—山村を選び、社会・文化史的視点から検討するものである。

対象 秋田県南部の農山村過疎地域であるC町を対象とした。

方法 調査と分析は、次の方法で行った。1) 対象地域に可能な限り長期間滞在し、地域住民の生活感覚を調査者自身が直接体験しながら、大人や子どもたちの生活や物に対する考え方を実態に即して把握し、記録するフィールドワークの方法を用いた。2) 小、中学生を対象に質問紙調査を行った。3) 1) 2)の結果を可能な限り既存資料と対比させ分析を行った。

結果 以上から、明らかとなった主な点は次の通りである。1. 農業の機械化と兼業化による産業構造の変化やモータリゼーションの進行、及び電話・TVの普及によって、子どもを取りまく社会環境は大きく変化した。2. 急激な子ども人口の減少によって、遊び相手を消失し、遊び集団の形成が困難となった。3. 家の手っぴが子どもの生活から消え、地域に育つ子どもの社会化過程の方向を示す決め手を失った。